

Title	セネガルの落花生生産・輸出の成長要因
Sub Title	The factors in the rapid expansion of the production and export of the groundnut in Senegal
Author	矢内原, 勝
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1978
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.71, No.2 (1978. 4) ,p.118(28)- 137(47)
JaLC DOI	10.14991/001.19780401-0028
Abstract	
Notes	山本登教授退任記念特集号 論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19780401-0028

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

セネガルの落花生生産・輸出の成長要因

矢内原 勝

- I 序——設問
- II 落花生の西アフリカへの到来
- III 落花生に対する需要の出現
- IV フランス植民地政策——落花生輸出の開始
- V 環境に対する適応性
 - V-1 自然条件
 - V-2 栽培の容易
- VI 土地
- VII 労働
- VIII 農民の行動様式
 - VIII-1 価格に対する反応
 - VIII-2 ムリディズムの影響
- IX 落花生生産と食糧生産
 - IX-1 落花生栽培
 - IX-2 農作業の組織
 - IX-3 落花生とアワの作付配分
 - IX-4 商社の役割
 - IX-5 行政の役割
- X 結論

I 序——設問

落花生はセネガルの主要農産物であるとともに主要輸出品（今日では落花生と落花生油）であり、この国はつとに落花生依存の典型的な輸出経済構造を形成していた（第1表参照）。マレーシアのゴムにしても、ガーナのココアにしても、ケニアの茶にしても、今日の主要輸出農産物はもともとその地方の原産ではない。セネガルの落花生もまた外来の植物である。外来の植物が輸出用商品として、急速にその生産と輸出が伸長したのは植民地時代である。そして生産の主体は、企業として経営されるプランテーション形態ではなくて、個々の農家である点、セネガルの落花生生産は、ガーナのココア、ナイジェリアのココア、落花生、椰子核・油と同様である。

輸出用農産物の生産と輸出が植民地時代に急速に成長した要因について、以下のような仮説を立

セネガルの落花生生産・輸出の成長要因

ることができる。

第1表 セネガルの輸出に占める落花生の地位

年	総輸出(1,000 フラン)	落花生輸出(1,000 フラン)	落花生の占める割合(%)
1900	32,932	24,240	73
1913	72,937	59,892	82
1920	428,690	292,735	68
1925	540,610	505,857	91
1930	599,223	501,844	83
1935	400,922	347,334	86

出所 Guiraud, Xavier, *L'Arachide sénégalaise*, Librairie Technique et Economique, Paris, 1938, p. 38.

- (1) その植物の環境に対する適応性。
- (2) 海外とくに植民本国よりの需要の出現。
- (3) 未利用の土地の存在。
- (4) 未利用の労働力の存在。
- (5) (1)~(4)までを与件として、その土地の農民が、需要の出現に応じた価格の上昇に反応し、土地と労働を追加的にその生産に投入し、技術一定のまま従来自給用食糧生産を犠牲にすることなく、生産量を増大することを可能にした。

本稿は、このような仮説が妥当するかどうか、さらにセネガルにはセネガルの特殊な要因があったかどうかを検討することを目的とする。

II 落花生の西アフリカへの到来

落花生の起源は、多くの学者によって、ブラジルの野生種であるとみられている。野生の落花生はまだ発見されていないが、落花生起源南アメリカ説に最も有力な根拠は、民族植物学の研究により、リマから35キロメートルの Ancon と60キロメートルの Lauri の、きわめて古いペルー人の墓の中から、この豆が発見されたことである。コロンブスの到着以前に、アメリカ大陸に落花生が存在したことは確実である。他方ヨーロッパ人の到着以前に、アフリカ大陸に落花生が存在した根拠は見出されない。

17世紀にミニモ会 (un religieux minime) のブルュミエ神父 (le Père Plumier) がアンティール諸島に伝道のため派遣された。彼はここで原住民によって manobi と呼ばれていたこの植物を発見し、Théophraste によって古代エジプトに栽培されていたと記述されている、地中に結実する植物 arkos にちなんで、これを arachidna と命名したのが、落花生 (arachide) の名称の起源であ

る。ただし、両者が同一植物であることはきわめて疑わしい。⁽¹⁾

アラブ人が陸路によってサヘルとスーダンの諸国にきわめて適当な、植生の短い草本植物をもたらしたのに対し、16世紀はじめにポルトガル人は海路により、ギニア海岸地域に適する各種の植物、とくに植生の長い植物をブラジルと極東の熱帯湿地あるいは赤道地帯からもたらした。落花生もその一つであったらしい。

落花生は mandique の人たちによって、ポルトガル人から直接受けつがれ、採用されたらしい。この植物は風土馴化が容易で、まもなくセネガルとガンビアの人たちは、その家の周囲にこれを栽培し始めた。しかし、この栽培は女の担当であって、食物としては副次的役割しかもたず、ソースの薬味あるいは補助食糧として炙り豆の形でしか利用されなかった。⁽²⁾ 搾油はされるとしても家庭内でなされた。それにしても、西アフリカのココアとちがい、輸出商品となる以前に、すでに土地の人々の食糧として、小規模ではあるが栽培されていたのである。

Ⅲ 落花生に対する需要の出現

セネガルを最初に訪ずれたヨーロッパ人は周知のようにポルトガル人であって、彼らは1444年から1546年の期間にベルデ岬とセネガル湾口を発見した。エンリケ航海王子によって派遣されたカダモスト (Cà da Mosto) が1455年に Damel を訪れ、ウォロフ族について最初の記述をポルトガルにもたらしたことは、彼の航海誌に詳しい。⁽³⁾ 16世紀後半期にポルトガルの独占時代は終了し、オランダ、フランス、イギリスの航海者たちがこの海岸を訪ずれ、フランス人はセネガル川を Fouta まで遡った。1588年にオランダ人は、ポルトガル人が奴隷貿易の基地として建設したゴレ島を占領し、イギリス人はセネガルおよび la Petite Côte と商業を営んでいた。⁽⁴⁾⁽⁵⁾

16世紀にフランス人がセネガル湾口に定着し、基地を創設したのはゴム貿易のためであり、続いては17世紀の第2・3半期には奴隷の搬出のためであった。ゴムと奴隷との交換のためにヨーロッパからもたらされた商品は布や小銃であった。長い間、落花生は国内交易にとっても、外国貿易にとってもその対象ではなかったが、西インド諸島向けの奴隷の輸出の際、乗組員と貨物である奴隷のため、落花生が食糧として使用されることになった。一隻の船に可能な限り多数の奴隷を積載す

注(1) Pehaut, Yves, *Les Oléagineux dans les pays d'Afrique occidentale associés au Marché Commun: La production, le commerce et la transformation des produits*. Thèse présentée devant l'Université de Bordeaux III—le 28 avril 1973—, pp. 259~260.

(2) *Ibid.*, p. 279, Lericollais, André, *Sob: étude géographique d'un terroir Sérèr (Sénégal)*, Mouton & Co., Paris, 1972, p. 78.

(3) フランス人は Ouolof, Ouoloff, Wolofなどと記す。

(4) カダモスト、『西アフリカ航海記』、『大航海時代叢書Ⅱ』岩波書店, 1967.

(5) Cf. Deschamps, Hubert, *Le Sénégal et la Gambie, Que Sais-je*, 597, Paris, 1964, pp. 44~45.

セネガルの落花生生産・輸出の成長要因

るために、彼らを船の通路の両側に頭を通路に向けて横たわらせ、食糧として通路に落花生をまいた。⁽⁶⁾これではまるで土地節約的産業としての鶏舎による鶏の飼育である。

1814～15年協定により、セネガルはフランスの領有に帰したのであるが、植民地争奪戦争の最中であって、とにもかくにも国旗を立てて領土とし、そのあとでその領土の本国にとっての利用価値を考えるのが実情であったらしい。そもそも19世紀初頭までは、熱帯アメリカと極東だけがヨーロッパにエキゾチックな食糧品を供給する唯一の場所であって、ヨーロッパ人は黒アフリカの熱帯農産品には何らの興味も示さなかった。ところが18世紀末の政治的变化、新しい思想、技術革命により事態は変わった。

イギリスの産業革命は機械油に対する新しい需要を生じさせた。動物性油脂と魚油の供給は不足していたし、機械油には適用できない。そのほかステアリンと石けん産業の需要が生じた。これらの需要をみたしたのは西アフリカのギニア湾沿岸の油椰子である。イギリス石けん産業の雄、リーバー (Lever) 社がゴールド・コースト (ガーナ) とナイジェリアにこの原料を求めて進出したのは有名な史実である。しかしイギリス産業は液体油原料の落花生にはあまり興味を示さなかった。

これに対してフランスの石けん業者、その大部分はマルセーユにあるが、椰子油を原料として採用しておらず、油脂原料の新しい資源を求めていた。

旧植民地での輸出用1次商品の生産の発展にとって、まず海外からの需要の出現が必要な点では、落花生も例外ではない。

IV フランス植民地政策——落花生輸出の開始

1815年に奴隷貿易が廃止され、ゴム貿易もマダガスカル以外では凋落した。セネガルはフランス領西アフリカ植民地の中心であり、内陸への拡張の基地であったから、フランスはここで何かを生産したかった。セネガル住民の食糧と輸出用に何か適当な農作物を導入したかったのである。

セネガルは西サハラ境界に位置し、一般的に気候は乾燥しすぎており、とくに北部は9か月に及ぶ長い乾季をもつ。降雨量が少ないうえに、どの川も灌漑に利用されていなかった。国内いたるところ、やせて小さな、乾燥に抵抗できる野生の木が生えているだけで、この国を乾季に訪れた旅行者は、荒涼の地という印象を受けた。面積約20万平方キロメートルの国土に、人口はわずか160万人にすぎず、平方キロメートルあたりにすると人口密度は8人にしかなかった。

このような気候と土質の地で、当初、肥沃だと信じていたセネガル川流域で、フランス人はあらゆる種類の現地の黒人用と輸出用の農作物の栽培を試みたが、これは失敗の連続に終わった。⁽⁷⁾

注(6) その図面が Gorée 島の博物館の中に保存されている。

(7) Papy, Louis, "La Vallée du Sénégal: Agriculture traditionnelle et riziculture mécanisée," *Les Cahiers*

1814年にフランスの植民地政策の下にフランス人植民者 (colon) がセネガルにやって来て、現地の人々を使って農業を試みた。この点もイギリスの植民地政策と対照的で、イギリスは西アフリカのような熱帯植民地に対しては、白人の土地所有を禁じたから、農園経営のためのイギリス人入植者はなかった。イギリス人が入植したのはケニア、ローデシア等の「居住植民地」である。

民間人ばかりでなく、1822年から27年までの期間、総督 Roger は、とくに稲作に興味をもっていた。産業としては繊維産業が試みられた。彼がその職を去って以来、農業実験は中止され、ゴム取引だけが残る。フランスの農芸家 Richard が農事試験所を設立し、各種の農産物を試みるが、あまり成功しない。当時のフランス人の視点からは、ウォロフ族は新しいものの栽培には熱意を示さず、自分のためにしないばかりでなく、ヨーロッパ人の農家 (concession) に労働しにくることも拒否した。⁽⁸⁾ 失敗の連続は、セネガル川はナイル川やガンジス川とは決定的にちがうこと、なおまたその農業技術、その慣習、その所有権に固執する現地の人たちは、大規模な農業経営の実現にとって障害であるという考えを確認させた。⁽⁹⁾

1834年以降 Devès と Chaumet により輸出の観点から現地での落花生の搾油の試みがなされたが、これはうまくゆかず放棄しなければならなかった。1840年にパリの化学者 Rousseau が落花生に含まれる豊富な油脂を発見し、ルーアン (Rouen) の商館を代表し Rufisque の近くに土地を買い、支店を創設し、de Saint-Jean と連合して落花生の栽培を試みた。彼らは1841年に2本マストの小帆船 Zénith 号で70トンの落花生を発送した。これは Sotteville-lez-Rouen で搾油され、その品質は業者を満足させた。しかし Rousseau と de Saint-Jean は、この取引では商人の Granges に先を越されていた。後者は Saint-Louis からマルセーユ宛 722 キログラムの落花生を発送し、そこの搾油所で加工されたが、その製品は良好と判断されたので、マルセーユ商業はただちに新しい注文を送った。このようにして輸出向けの落花生栽培がセネガルに誕生したのである。⁽¹⁰⁾

落花生栽培は Saint-Louis, Rufisque, Gorée 島の諸港の近辺から奥地へと急速に広がった。1882年に Dakar-Saint-Louis 間に鉄道が開通し、各駅は落花生の取引地点 (escale) となった。⁽¹¹⁾ フランスの支配が進むにつれ、落花生栽培はセレル族の領域に及び、Siné と Saloum の平定は Kaolack の港町を生産の新しい中心地とした。さらに1923年の Thies-Kayes 間の鉄道の開通は、落花生生産の可能性を東へ延長し、1931年に Louga-Linguère 間および Diourbel-Touba 間に新線が開通し、とくに後者はただちに落花生生産に利用された。⁽¹²⁾

d'Outre-Mer, T. IV, n°16, octobre-décembre 1951, p. 308.

注(8) *Ibid.*, pp. 310~312.

(9) *Ibid.*, p. 313.

(10) Guiraud, Xavier, *L'Arachide sénégalaise*, Librairie Technique et Economique, Paris, 1938, pp. 34~35.

(11) 村または町。

(12) フランス人は Serer または Sérèr と記す。

セネガルの落花生生産・輸出の成長要因

落花生は輸出用生産物であるから、積出港までの鉄道が開通すれば、生産地はその沿線を遡って開発される。このようにして、セネガルからの落花生の輸出は、天候不順と落花生市況の不況によって、時々落ち込みながらも急速に伸長し、1840年にカラつき1トンの輸出を記録したのが、1900年に10万トン、1909年に20万トン、1915年に30万トン、1925年に40万トン、1930年には50万トンを越えた。

フランス植民地当局は、多くの失敗の末やっと落花生という輸出用生産物を発見し、「これはセネガルにとって神の摂理 (une Providence)⁽¹³⁾」とまで言っている。行政の努力は Bambey の農事試験所に象徴されるような、生産量の増加と品質向上のための農業技術指導、前記の鉄道の建設のような流通機構の整備、価格政策等に具体化されている。Guiraud は行政側の人間であるから、その点は割引して考えなければならないであろうが、彼によれば、正当な努力をしたのは行政府だけである。ヨーロッパ人植民者 (コロソ) は研究に貢献し、新しいものの実現の先頭に立つことができたはずなのにそれをしなかったし、現地の耕作者はノンチャランで、その効用、要求されている努力の意味を理解することができない。商人は一般的に現地の人に近く、その言語を話せるにしても、その視野はあまりにもしばしば目前の利益を引き出すことに限られ、全体にとって有用で貴重であったはずの大きな競争の場を持ちこまなかった。もし行政府が落花生栽培に興味を失ない、これを現地の耕作者自身にゆだねたならば、生産は完全に崩壊し、国は破滅の状態に陥ることは明らかであると言っていた。⁽¹⁴⁾

V 環境に対する適応性

V-1 自然条件

セネガルの気候は、前記のように乾季が長く、したがって植物の生育期である雨季が短い。落花生はきわめて急速に成熟する。通常の品種で植生のサイクルは110日から120日であり、他の品種たとえば Cayor で選ばれた品種には90日を越えないものもある。この急速な成長にはある量の水分と空中の湿気を必要とするが、雨季が数か月しかないにしても、落花生にはそれで十分である。そのうえ落花生はその成長に土壌の質をあまり選ばない。ただし、軽い土のほうが結実に有利であるし、また収穫時に掘りおこすのが容易である。重い土はどんなに肥沃でも選好されない。

V-2 栽培の容易

落花生の栽培はきわめて簡単であって、セネガルの人々の無気力に適している、少なくともこれ

注(13) Guiraud, *op. cit.*, p. 39.

(14) *Ibid.*, pp. 49~50.

に興味をもった最初の人々、利巧だが農民に適した仕事への熱意と適応力をもたず、継続したつらい努力をするよりも、長話しをして議論する傾向のあるウォロフ族に適していると、Guiraud は⁽¹⁵⁾言う。

ウォロフ族に対してセレル族は、安定した農民として定評があり、フランス行政府は、のちに新開地 (Terres Neuves) に対してウォロフよりもセレルを落花生農民をして移植しようと試みるのであるが、一般にフランス人のセネガルの人々に対する農民としての質の評価は低いようである。少なくとも落花生の輸出用生産開始当初の評価は低く、1951年に書かれた Papy の論文にも、現地の人は落花生に興味を示さず、労働の質のわるいことが引用されている。⁽¹⁶⁾

このことは、ガーナ南部のココア農民が企業家的行動を示した点を高く評価する Polly Hill⁽¹⁷⁾ や、ナイジェリアの Yorubaland のココア栽培成功の大きな要因を、現地の人々の小農栽培に求めている Pierre Gourou⁽¹⁸⁾ ときわめて対照的である。もちろん、Guiraud の本が1938年刊行ということとも考慮に入れる必要がある。今日、前記のような批評をセネガル農民に下すことは、もちろん適当でない。

コートジボワール人の著書には、さすがに落花生栽培は、現地の農民の無気力に向いているとは書かれておらず、かつては「家庭栽培 (culture de case) であった落花生は、セネガル農民の伝統にとって未知の生産物ではなく、彼らの生活様式の中に導入されるのに困難がなかった」と記している。⁽¹⁹⁾

VI 土地

少なくとも落花生の輸出用生産が開始され、その生産が拡張されていた時期に、この生産のために未利用の土地が利用できたかという仮説に対しては、次のような事実を指摘することができる。

輸出用の生産物にとっては、需要の存在するヨーロッパに対する搬出、船積の問題がまず重要である。たとえワガドグの奥地にマンガン鉱脈が存在することがわかっているとしても、その搬出の費用が大きければ、輸出は経済的理由で実現されない。セネガルの落花生の場合も、前記のようにまずその生産は Saint-Louis, Rufisque および Gorée 島の諸港の近辺に始まった。続いて下セネガル

注(15) *Ibid.*, p. 41.

(16) Papy, *op. cit.*, p. 36.

(17) Hill, Polly, *The Migrant Cocoa-Farmers of Southern Ghana; A Study in Rural Capitalism*, Cambridge University Press, London, 1963.

(18) Gourou, Pierre, "Les Plantations de Cacaoyers, en pays Yoruba: Une exemple d'expansion économique spontané," *Annales Economies, Sociétés, Civilisations*, T. XV, n° 1, janvier-février 1960, pp. 60~82.

(19) Diarassouba, Valy-Charles, *L'Evolution des structures agricoles du Sénégal*, Editions Cujas, Paris, 1968, p. 67.

(Bas Sénégal) と Gandiolai を結ぶ地域にその生産は拡がった。⁽²⁰⁾ さらに落花生生産地帯は沿岸の Cayor から東と南すなわち Diolof, Baol さらに Siné-Saloum へと移ってゆく。落花生の大生産地域は bassin arachidier を呼ばれているが、これは通常、Siné-Saloum (Kaolack), Diourbel および Thiès の三大生産地から構成されているとみられている。⁽²¹⁾ この地帯は人口の増加と、落花生の継続的栽培による土地の肥沃度の低下により、もはや古い地帯となり、落花生生産は退潮の傾向にある。これに代って落花生生産を担いつつあるのはさらに東の新開地 (Terres Neuves) である。落花生栽培農民であるウォロフ族とセレル族がこの土地に移動している。さらに新開地自体も、東へ東へと開発が進んでいる。Paul Pélissier が1966年の大著の中で掲げている「新開地」の領域⁽²²⁾ に比べると、1972年1月25日政令によるその領域は、かなり東へ移動している。⁽²³⁾ 新開地は未利用の、かつほとんど無人の森林地帯であった。水の問題があるので、そのままでは落花生生産地帯とはならない。しかし井戸を掘ることによって、農民がこの地帯に定着することが可能となる。新開地の村の創設者は事実上、望むだけ広い領域を切り取ることができるし、また早く来た者には大きな土地を分配することができる。権利を確認させるため、土地はできるだけ速やかに開墾された。⁽²⁴⁾

やがて人口が増加し、休閒期間が短縮され、土地の肥沃度が低下してくると、人々はさらに東へと移動する。したがってこの農業の型は、きわめて大きな規模の移動農耕の一種と解釈できる。移動農耕は土地集約的である。この農耕の実施が可能であるという事実は、局地的には土地は不足してくるが、セネガル全体としては、なお落花生生産にとって潜在的に利用可能な土地が存在することを意味する。土地の生産への追加的投入は、農民が新しい土地へ移って開墾するという形態で実現されたのである。

Ⅶ 労働

落花生栽培のための労働需要は短期間、4か月そこそこに集中する。その生産にとっては、土地よりも労働力が制約条件である。スーダン地方(今日のマリ)およびギニアからくる季節的労働者、ナベタヌ⁽²⁵⁾ (navétane) がその間の労働不足を埋めた。かつてはマリのバンバラ (Bambara) 族が、雨季が近づくと一般に徒歩でセネガルの大落花生生産地帯に南下してきた。彼らは耕作単位の長であ

注(20) Guiraud, *op. cit.*, p. 35.

(21) Roch, J., "Les migrations économiques de saison sèche en bassin arachidier sénégalais", *Cahiers ORSTOM, sér. Sciences Humaines*, vol. XII, n°1 1975, p. 59.

(22) Pélissier, Paul, *Les paysans du Sénégal*, Imprimerie Fabrègue, Saint-Yrieix, 1966, p. 301.

(23) Dubois, Jean-Paul, "Les Serer et la question des Terres Neuves au Sénégal", *Cahiers ORSTOM, sér. Sciences Humaines*, vol. XII, n°1 1975, p. 82.

(24) Dubois, Jean-Paul, *L'Emigration des Serer vers la zone arachidière: Contribution à l'étude de la colonisation agricole des Terres Neuves au Sénégal*, ORSTOM, Dakar, 1971, p. 41, Dubois, 1975, p. 93.

(25) ウォロフ語の雨季 (navet) からきている。

るディアテュギ⁽²⁶⁾(以下家長と呼ぶ)の下に寄宿する。彼らの身分は客人であるとともに被雇用者である。家長は彼らのために耕地と種子と住居と食糧を与える。彼らは家長のために1週に4日の午前中を労働したが、残りの時間は自分の畝で落花生を作り、その収穫物は自分のものとなる。したがって出稼ぎ人は一種の分益農であるが、ヨーロッパとまったく異なるアフリカに対して、ヨーロッパ農業の概念をあてはめることは危険であろう。出稼ぎ人・ナベタヌはナベタヌであって、季節的農業労働者の一種である。

収穫が終ると、ナベタヌは、できるだけ早く引き揚げようとする。自分に割り当てられた畝で収穫された落花生をカネに変え、同僚を羨ましながらせながら汽車にのって故郷に帰る。

ナベタヌのほか、10月になってから収穫作業にだけ来るフィルドゥ^(firdou)と呼ばれる季節的賃金労働者がいる。

労働力不足のセネガルは、勤勉なバンバラ族を歓迎し、鉄道料金に特別運賃を適用し、1932年にはダカールの商業会議所(Chambre de Commerce)は、ナベタヌに生計費の前貸を認めたが、この計画は大きな反対があったので長続きはしなかった。バンバラ族がセネガルに定着することをおそれた⁽²⁷⁾からである。

1938年当時、Siné と Saloum の落花生生産地帯はすでに土地が希少になり、肥沃度が落ちたため、バンバラにとってはエデンの園ではなくなった。それに加えてマリに落花生生産が導入され、税制上優遇されたので、マリ農民は、自分のところで落花生を多量に栽培するようになった結果、セネガルに来るナベタヌの数が減少した。

1939年以前の落花生生産発展の最盛期の何年かには、セネガル全体に7万人近いナベタヌがいた。⁽²⁸⁾第2次大戦中にその数は減少し、1946年、自由が戻ったときに、その数は1万2,000人に低下していた。1947年から55年までの期間、年平均5万人が出稼ぎにきた。彼らを惹きつけるために往復の旅費を無料にしたが、この措置は1956年に中止され、1958年のギニア国境閉鎖により、季節的労働移動は大幅に減少した。⁽²⁹⁾

ナベタヌの制度そのものは今日も存続し、新開地に対して、セネガル内の西部からそれはやってくる。

輸出用生産物の生産拡張期に外部から労働者がくる点では、ビルマの米生産にとって初期には上ビルマから、のちにはインドから、ガーナのアシャンティ地方のココア生産に対してオートボルタやニジェールなど近隣各地から労働者が移動してきた事実と酷似している。

注(26) diatugui あるいは doutigui, 家長, バンバラ語, これについては R-2 であれる。

(27) Guiraud, *op. cit.*, p. 74.

(28) Pehaut, 1973, p. 698, Tabreau 90によると、ピークは1938年で、その数はセネガル全体で69,767人, Siné-Saloum 内に57,715 人である。

(29) Pehaut, Yves, "L'Arachide au Sénégal, "Les Cahiers d'Outre-Mer, T. XIV n° 53, janvier-mars 1961, pp. 9~10.

VIII 農民の行動様式

VIII-1 価格に対する反応

第2次大戦までは落花生価格は、ヨーロッパ相場も、セネガルの積出港価格も、生産者価格も自由市場で変動していた。他方、セネガルの落花生輸出量は、IVに記したように、1840年の1トンから始まり、1843年に2千トン台、1872年に1万トン台、1900年以降、1905年を除いて10万トン台、1930年に508,195トンを記録しているが、これも年々の変動が激しい。資料の制約から、輸出量と積出港価格を正確に合わせることはできないが、参考までに第2表を作ってみた。なお生産者価格は、積出港価格から生産地と港の間の運賃を控除したものであるから、両者の変動は相関している。

第2表をみても看取できるように、輸出量と積出港価格との間に直接の相関関係はないようである。

第2表 落花生輸出量と積出港価格の推移

年	輸出量(トン)	年	積出港(Saint-Louis) 価格(フラン; 100キログラムあたり)
1843	2,600	1843~45平均	16
1853	3,000	1846	20
1855	4,400	1857	26
1865	5,811	1860~67	25~27.50
1873	16,408	1868~77平均	20.80
1902	110,225	1902	18 (18)
1906	100,476	1906	24 (23.20)
1913	242,084	1913	24.75 (27.39)
1917	175,476	1917	30* (75.14**)
1920	300,339	1920	(115.55**)
1925	453,733	1925	(140.69)
1930	508,195	1930	(122.75)

* Rufisque港価格 ** 1部はセネガル内に再販売された

() Maurel et Prom 社の平均価格F. O. B.

資料: Guiraud, *op. cit.*, p. 164, () 内の数字はPehaut, 1973, p. 547, Tableau 51.

落花生は農産物であり、しかも長期の貯蔵は困難であるから、短期の輸出供給あるいは生産者の商社ないし協同組合への引渡し量の価格弾力性は高いとは思われない。Diarassoubaはセネガル落花生の輸出成長は、直接には輸出入商社の利潤に依存するとみているが⁽³⁰⁾、資料の裏付はない。

1882年まではセネガルとフランスの間の落花生貿易は、外部から閉じられていた市場内にあった。しかし1883年以降、ボンベイとコロマンデルから輸出されるインド産落花生とゴマ、アメリカ産の綿実油との競争は、西アフリカ落花生相場を絶えず圧迫するようになった。Cayor産落花生のヨ

注(30) Diarassouba, *op. cit.*, p. 68,

ヨーロッパ価格は、100キログラム平均36フランだったのが、1889年に27~28フランに下落、1889年の積出港価格は20フランであったが、1896年には14フランに下落した。⁽³¹⁾しかし他方で、この不利な状況にもかかわらず鉄道が延長され、落花生生産地域は Cayor から西 Baol にまで拡張している。生産量=輸出量と価格が相関関係を示さない理由の一つは、落花生生産量はまた鉄道路線延長の関数でもあるからと推定される。

第1次大戦中、農民の多数が戦争に動員されたため、生産量は一時的に減少し、フランスの油脂原料に対する需要がつかったので、価格は上昇した。好景気は1929年の恐慌まで続いた。落花生生産量=輸出量もこれに応じて、1919年から30年にかけて飛躍的に増大している。⁽³²⁾

落花生の輸出用生産を開始したのはウォロフ族であり、さらにセレル族を加えて、その担当者はセネガル農民であった。彼らは落花生生産を植民地行政府より強制されたわけではない。換金作物であるこの植物を彼らが生産するようになった理由は、行政府によって課された納税と、落花生取引地点(escale)に貨幣経済が進出し、貨幣でなければ購入できない新しい財の出現した結果の、貨幣に対する需要の誕生と増大である。したがって長期をとれば、セネガル農民が落花生価格の動きに反応しないはずはない。以下これを間接的に証明するために3事例をあげる。

(1) 落花生に支払われる高価格を予想し、農民は主食のアワの栽培を無視した結果、深刻な食糧不足に陥った。⁽³⁴⁾1936年にも落花生価格の高相場に刺激された生産者は、落花生の大生産地帯内で、食糧栽培をほとんど見捨てた。⁽³⁵⁾他方、新開地に入植した農民は Kaolack 近辺の落花生生産による報酬が高いことに惹かれたのであって、落花生相場が低下すると、かつて見捨てた古い土地にしばしば戻る。⁽³⁶⁾

(2) 1885年から1931年の期間をとっても、フランス領西アフリカの落花生は、西ヨーロッパ内はもちろん、フランス内ですら油脂原料供給者として価格を支配できる立場にはない。世界市場価格が低下すれば、西アフリカの落花生輸出に携わる商社は、当然生産者価格を引き下げる。落花生生産農民は生産者価格決定に影響を及ぼす力はないが、相場があまりにも低ければ、農民は落花生の販売のストライキ(拒否)によって応えた。1893年12月、Siné-Saloum 内で生産者は落花生の販売を拒絶した。商人の提示した価格があまりにも低かったからである。結局、商人は前年の100キログラム12.5フランから15フランに対して、10フランを提示した。⁽³⁷⁾

注(31) Guiraud, *op. cit.*, p. 164, Pehaut, 1973, p. 458.

(32) 1925年から29年は落花生の黄金時代と呼ばれている。Pehaut, 1973, p. 570.

(33) フランス語 mil. これには早まき種(フランス語 petit mil précoce あるいは hâtif, ウォロフ語 souna, セレル語 pod)と晩まき種(フランス語 petit mil tardif, ウォロフ語 sanio, セレル語 matye)がある。モロコンと呼んだほうがよいかもしれないが、本稿では両者を一括してアワと呼ぶことにする。

(34) Pehaut, 1973, p. 563.

(35) *Ibid.*, p. 701.

(36) *Ibid.*, p. 699.

(37) *Ibid.*, p. 549.

セネガルの落花生生産・輸出の成長要因

(3) 落花生は、カラをとったほうが重量も容積も減少する。カラは重量の30パーセント、容積の60パーセントを占める。したがって、ナイジェリア、モザンビク、西アフリカのセネガル以外のフランス領植民地、スーダン（今日のマリ）、ニジェール、コートジボワール等は、一般的にカラを落した落花生を輸出していた。ところがセネガルは、他の落花生生産国より販売市場が近いという有利な条件のために、かえってカラつきのままで輸出していた。Guiraudは、セネガルも落花生輸出について、カラを落すことを主張しているが、⁽³⁸⁾1929年の恐慌前夜、セネガルから輸出される落花生の約半分はなおカラつきであった。⁽³⁹⁾

カラなし輸出の反対者は、一つはボルドーの搾油業者であって、貯蔵および運送中に蒙むる酸化と品質変化が、カラなしの場合に大きい、という根拠である。しかし精製と防臭技術および輸送手段の進歩はしだいにこの困難を克服した。この間に、1931年3月に鉄道運賃が改訂され、Koulikoro-Kayes間で、1トンにつき、カラつきは295フラン、カラなしは155フランとなった。カラを落す費用は機械化により、かえって50フランから85フランに上昇し、したがって機械化は遠隔地には普及しない。しかし、カラをとることにより、運賃はトンあたり140フラン低下するから、1934年以降、カラを落すことは急速に進展した。

以上3例が示すように、農民は価格と費用に十分反応している。

VIII-2 ムリディズムの影響

これはセネガル内でもウォロフ族に限る特殊なものではあるが、落花生生産地帯のフロンティア拡大にとっては無視することはできない。

ウォロフは、約400万人というセネガルで最大の人口をもつ部族である。彼らは前世紀末に集団的にイスラムに改宗した。イスラムはTidjanisme派とMouridisme派に分れた。前者は自由農民を中心とし、宗教的寛容を示すのに対し、Amadou Bamba (1927年死亡)によって創立された後者は、貴族・戦士集団であり、戦闘的・活動的・冒険的である。その信奉者にとってイスラム教は、快楽の放棄の上に立つ宗教である。農業労働の成果を導師(marabout)に提供することは、彼らの道徳的義務である。

彼らの新しい土地の開墾に対する情熱は、落花生生産地帯のフロントを東へ東へと、とくにダカール=ニジェール鉄道沿線への拡張の動力となった。⁽⁴⁰⁾

ウォロフ族は開拓の先頭に立つが、地力の維持を考えず、目前の利益の最大化だけを優先するとされている。落花生を栽培する場合に、輪作による休閑はきわめてまれにしか行なわれない。落

注(38) Guiraud, *op. cit.*, pp. 238~245.

(39) Pehaut, 1973, p. 703.

(40) Pélissier, *op. cit.*, pp. 117~122, Roch, *op. cit.*, p. 56.

花生のフロントがマリ近くの東部の、表土が紅土で覆われている土地にぶつかると、開墾される土地は不安定となる。⁽⁴¹⁾ウォロフの落花生生産のために、新開地が荒廃することをおそれて、ムリディスムの波の中に、安定した農民という定評のあるセレル族を入植させ、ムリディスムの運動を阻止しようという政策が、行政府により1934年以降試みられた。

ウォロフ族の新開地の落花生生産とナベタヌによる落花生生産は、食糧生産が軽視され、⁽⁴²⁾ 休閒期間が短かいので肥沃度の低下がはなはだしい、として一般に評価されていない。しかし、落花生生産地帯拡大の原動力として、ムリディスムを無視することはできないのである。

X 落花生生産と食糧生産

落花生生産の拡張が、従来の自給用食糧生産を減少させることなく実現できたか、という問題には微妙な点がある。カカオのように、食糧用の耕地とまったく異なる場所で植林が行なわれるのではなく、落花生は、ときに主食のアワと同じ畠の上で輪作されるからである。この問題に入るには、まずセネガルの落花生栽培の実態をみる必要がある。

X-1 落花生栽培

初期の伝統的な落花生栽培は、畠の準備、播種、除草、収穫の4段階にわけられる。⁽⁴³⁾

(a) 畠の準備。春すなわち乾季の終わりに、樹木・小灌木が地上60ないし70センチの高さを残して伐採される。枝はその場で焼かれ、その灰は土壌の肥沃化に役立つし、また害虫を殺すといわれる。すなわち焼畑であるが、この手法は熱帯アフリカで一般的にみられるものである。休閒地1ヘクタールを畠にするためには25日から30日の労働を要し、前年耕作された畠ならば8日で十分である。⁽⁴⁴⁾ 畠の準備ができれば雨を待つ。

(b) 播種。最初の降雨(一般的には6月)をみると直ちに播種する。深さ4から5センチの小さな穴を30~70センチの間隔であける。そのあとに女か子供が2, 3粒の種子を穴に落とし、かかどで土をかける。⁽⁴⁵⁾

(c) 除草。種子は約1週間後に発芽し、小枝が四方八方に伸び、黄色の花がいたるところにつき、

注(41) Pehaut, 1961, p. 9.

(42) 新開地に入植したウォロフは耕地の60パーセントを落花生のために使用し、主食のアワのためには40パーセントしかさかない。Pehaut, 1961, p. 9.

(43) 主として Lericollais の Sob 村の事例研究による。Lericollais, *op. cit.*, pp. 67~69.

(44) Guiraud, *op. cit.*, pp. 70~71.

(45) 今日では家畜牽引の播種機が導入されている。たとえばロバが2輪車を引き、これに播種機が積まれている。労働者が前に1人、後に1人つく。

セネガルの落花生生産・輸出の成長要因

植生の期間中発芽し続ける。つづいて受精し、花が落ち結実する。この間、7月と8月に除草作業を行ない、9月に最後の除草を行なう。除草労働にはヘクタールあたり30日を要する。

(d) 収穫。10月終りあるいは11月初めに収穫がなされる。落花生は地下34~5センチで切断され掘りおこされる。そのまま1~2日その場におかれたのちに小山に集められ、さらに2~3日後大きな山に集められ、2~3週間乾燥される。その後、実(さや)をとるために打つ仕事は女と子供の担当である。

これらすべての農作業は雨季の短期間、しかもアワ、五月ささげ等の食用作物の栽培と並行して行なわなければならない。⁽⁴⁶⁾

つぎに、セネガルの落花生の生産を行なっている、2大部族の耕作方法をみよう。

(i) ウォロフ農民。Cayor や Siné-Saloum のウォロフ族の落花生栽培は最も伝統的方法に依存している。彼らはなお移動(nomade)耕作を実行しており、ブッシュを焼く。そこでアワと落花生の輪作を行なうが、輪作の形態はあまり厳密ではない。施肥せず、肥沃度の尽きるまで耕作を続け、その後15ないし20年間の休閑地とする。このような長い休閑を伴う農耕法は、それ自体土地の豊富なことを表現しているが、今日人口圧力によって、長い休閑に必要な広大な面積がなくなってきた。つまり耕作継続期間を1単位とし、肥沃度の回復に20年を要すれば、その20倍の面積が必要である。古い落花生生産地域では、対策をしないままに休閑期間が短縮され、土地の肥沃度の低下が急速で、土地あたり収穫量が低下し、Cayor ではヘクタールあたり700キログラム以下となり、⁽⁴⁷⁾落花生栽培の後退が顕著である。

(ii) セレル農民。セレルはスーダン(マリ)起源の1グループであるが、Mandingue によって追われて Siné-Saloum に定着した。彼らは主としてアワを栽培していたが、落花生がのちに導入された結果、ウォロフとちがって落花生のために専用の畠を設けている。彼らはアワ1ヘクタールに対して、落花生を70アール栽培している。彼らは村の周辺の土地にアワ、綿花、ヤマイモ(manioc)を栽培するとともに、その外側にアワ、落花生、休閑の3年輪作を行なっている。休閑地には家畜が放牧され、翌年の耕作のための肥沃化に資する。この三つの部分は生垣もしくはトゲのある木で作られた垣根によって分離されている。落花生は換金用の副次的生産物ではない。

X-2 農作業の組織

農作業の組織は、ウォロフもセレルも同一である。居住の単位は塀によって囲まれており、その中に各種の家屋(小屋に近い、離れといってもよいが、離れに対する母屋はない)が立っている。この単

注(46) フランス語 haricot, ウォロフ語 niébé.

(47) Pehaut, 1961, p. 7, Pélissier, Paul, "L'arachide au Sénégal. Rationalisation et modernisation de sa culture", *Les Cahiers d'Outre-Mer* n° 15, juillet-septembre 1951, p. 204.

位を屋敷(ウォロフ語 keur, セレル語 m'bind, フランス語 concession または carré, 英語 compound) と呼ぶことにする。この中には、複数の世帯(ウォロフ語 n'dieul, セレル語 n'gak, フランス語 cuisine または foyer)が入っている。世帯は共通で食事をとる単位でもあるし、農作業の時の単位でもある。一つの世帯の中に複数の家族(フランス語 ménage)が含まれることもある。⁽⁴⁸⁾ 主要な家族の長と、主要な世帯主(ウォロフ語 borom n'dieul, セレル語 yal n'gak)と主要な屋敷の長は同一人物が兼任するのが自然であろう。

屋敷内の身分としては屋敷の長、世帯主のディアテュギと妻、家族員(スルガ)に分れる。季節的出稼ぎ人ナベタヌをスルガと区別するかどうかについては説は分れる。Dubois は現在ではナベタヌの身分はスルガであるとみている。これは出稼ぎ人を家族員として待遇するかどうかの問題である。もともと出稼ぎ人は既述のように、分益農であるとともに、その家の客人でもあった。

これだけではわかりにくいと思うので屋敷構成の一例を作った。⁽⁴⁹⁾ 第3表がそれである。この屋敷は2世帯すなわち農作業の2組をもつ。屋敷はまた消費の組織でもある。

第3表 屋敷内農作業の単位

世帯	家族	親族関係	身分
第1世帯	第1家族	1 屋敷の長	ディアテュギ
		2 1の第1の妻	妻
		3 1と2の息子	スルガ
		4 3の妻(と子供たち)	妻
		5 1の第2の妻	妻
		6 ナベタヌ	スルガ
第1世帯	第2家族	7 1の甥(世帯主)	スルガ
		8 7の妻(と子供たち)	妻
第2世帯	第3家族	9 1の弟(と息子)	ディアテュギ
		10 9の妻	妻
		11 ナベタヌ	スルガ

IX-3 落花生とアワの作付配分

新開地に入植したウォロフの農作業について、Rocheteau の Darou Kharim 地区の一屋敷に⁽⁵⁰⁾ についての事例研究の結果を整理して、落花生とアワの作付配分の決定要因を探ってみよう。

注(48) 日本に存在しないものに、日本語をあてはめることは危険であるが、英語、フランス語をあてはめても危険は同じである。かといって現地の発音をカタカナで表記するだけでは概念はつかみにくいので、参考までにこのような日本語をあてはめてみた。

(49) 農作業組織については Dubois と Lericollais の研究を参照にした。この構成図は私の虚構である。

(50) Rocheteau, G., "Pionniers mourides au Sénégal: Colonisation des Terres Neuves et transformation d'une économie paysanne," Cahiers ORSTOM sér, Sciences Humaines, vol. XII, n° 1, 1975, pp 42~48.

セネガルの落花生生産・輸出の成長要因

この論文は1975年に発表されているから、時代は現代とみてよい。すでに農機具の機械化が進み、動物牽引の播種機とスキが導入されている。

簡単化のため、作物は主食のアワと輸出用の落花生とする。屋敷の農作業担当者は家長（ディアテュギ）と2人のスルガおよび1人のナベタヌである。土地よりも労働力が生産の制約条件であるから、農作業時間のアワと落花生への配分が、生産配分の決定要因である。

アワは播種後2か月内の除草を怠ると、収穫高は激減する。8月ないし9月に行なうアワの第1回の除草は、落花生の第1回の除草と競合しない。問題は落花生の第2回の除草である。6月と7月の播種と第1回の除草のために家畜が集中的に使われてしまうので、第2回の落花生の除草は手作業によらなければならない。この労働強度は大きく、これを実施すると、アワの第2回の除草は全面的に犠牲にされなければならない。⁽⁵¹⁾

各人の個人的畠の上での農作業時間の配分は屋敷の構成員の地位によってかなり異なっている。これを抽象化すると第4表のように示される。

第4表 落花生とアワの除草労働配分

	アワの除草		落花生の除草	
	第1回	第2回	第1回	第2回
家長	×	×	×	
第1スルガ		×	×	×
第2スルガ		×	×	
ナベタヌ		×	×	

×は作業の実施を示す。

(1) 家長

家長の行動はその他の従属家族員とはきわめて異なっている。

家長は自分の支配下にある、ナベタヌを含む家族全員の扶養すなわち食糧と居住に責任がある。すでに貨幣経済の浸透している今日、食糧は購入することもできる。事実、新開地ではアワの収穫は不足しがちで、最も用心ぶかい農家を除いて、雨季の開始とともにナベタヌが到着したとき、一般に食糧の備蓄はすでに尽きている。家長は自分の家族のためばかりでなく、ナベタヌの食糧給与のためにも借金しなければならない。労働力不足傾向にある落花生生産地帯では、雇用の際の力関係は被雇用者のナベタヌ側につよく、後者は雇用者を選択する際に、その穀物倉までのぞいてみる。⁽⁵²⁾ 家長の立場からは、食糧を十分用意しないと、労働力を確保できない。

国際分業の観点からは、セネガルが落花生生産に特化し、食糧を輸入することも考えられるが、個々の家長としては、単作によるリスクを避けるために、相対的にアワの生産に重点をおくのは当

注(51) Rocheteau, *op. cit.*, p. 41, p. 44.

(52) Pélissier, 1966, p. 449.

然の行動様式である。

家長はアワの第1回の除草から始めて、この作業を9月半ばまで継続する。

(2) 3人の従属家族員

彼らは相対的に落花生生産を優先する。アワの除草は、おそい時期に1度行なわれるだけである。言いかえれば、アワの第1回の除草は実施されない。彼らのアワの除草のための労働時間は40時間であり、その4分の3は牽引スキによってなされる。アワの収穫は150キログラムであって、最低価格1キログラム15フランとすると、収入は2,000フランを幾分越える額となる。除草による収入は、労働時間あたり50フランとなる。

第1スルガとナベタヌは、ほとんど同一の農作業配分をしているが、一つの差異は前者が第2回の落花生除草を実施し、後者はこれを行なわないことにある。この点に注目して、Rocheteauは次のような分析をしている。

第1回の除草に要する労働時間は、前者が44時間、後者が43時間で同一視できる。第1スルガの除草の総労働時間は235時間で、所得は29,309フランであるから、時間あたり収入は124フランとなる。これに対してナベタヌは152時間労働して17,271フランを稼ぐから、時間あたり所得は113フランとなる。その差11フランが、落花生の第2回の除草による追加所得である。

Rocheteauは、この11フランを50フランと比較して、農民が、アワの牽引スキによる、おそい時期の除草のために、落花生の手作業による第2回の除草を幾分犠牲にする理由がある、としている。しかし11フランと比較されなければならないものは、第2回の落花生の除草によって犠牲にされたアワの除草による、その収穫減少分であるから、彼の論理は納得できない。現実には、このナベタヌは落花生の第2回除草を放棄するかわりに、アワの除草を実施してはいないから、この減少分に関する資料が得られないのは仕方がない。

第2スルガの農作業の配分は、第1スルガとナベタヌのそれとはかなり異なっている。

以上はアワと落花生の除草作業だけに関するものである。屋敷全体としては、このほかにも種々の労働があることは、第5表にみられる。この労働配分は、おそらく第1スルガは家長の息子であり、水汲みに責任をもたされているが、第2スルガは家長の母系の甥であって、最近屋敷に入った⁽⁵³⁾、という身分の差も関係しているのかもしれない。

他方、落花生の除草のための牽引スキの利用は、面積あたり労働時間の減少を伴わないが、アワではこの減少がみられる。機械装備率が高まると、労働時間のアワと落花生との間の配分は不変⁽⁵⁴⁾のまま、アワは面積あたり労働時間が減少するので、相対的にアワ畝の面積が拡大するという。

アワの栽培面積の相対的増加は、この2、3年(1975年現在)セネガルの一般的現象である。Ro-

注(53) Rocheteau, *op. cit.*, p. 48.

(54) *Ibid.*, pp. 41~42.

セネガルの落花生生産・輸出の成長要因

第5表 家数内男子構成員の労働寄与 (時間)

労働	家長	第1スルガ	第2スルガ	ナベタヌ
農業労働 (開墾)	154	149	175	48
非農業労働 (水の運搬)	29	287	40	3
家畜の世話		32	21	4
建築 (家屋・穀物倉)	34	8	10	6
農器具の修理		9	0	0
共同の仕事		32	52	0
その他		14	0	0
非農業労働合計		382	123	21

出所: Rocheteau, *op. cit.*, p. 47, Tableau XVII

cheteau は、そこに商業用栽培にとっての不満の徴候と、自給用植物への復帰をみるが、どうであろうか。

Rocheteau の大きな努力にもかかわらず、この因果関係は、なお判然としないものが残っている。しかし食糧生産と落花生生産は、現在では労働が制約条件となって、明らかに両方を同時に拡張できる経済ではない。播種と除草の機械化が進むと、これは労働節約的であるはずだが、実際に生じていることは、新開地に移動し装備率が高まるとともに労働時間も増加している⁽⁵⁵⁾。栽培面積が増大したことで、機械による作業のほうが労働強度が低いので長時間労働できる、ということがその原因かもしれない。

IX-4 商社の役割

落花生の輸出および外国消費財の輸入についてのセネガルの流通機構は、西アフリカ一般にみられるように、ヨーロッパ系商社、フランス人およびレバノン・シリア系の独立商人、セネガル人小商人というヒエラルキーを形成している。セネガル農民は1919年には、落花生価格の高騰を予想してアワ生産をまったく無視した結果、食糧が不足し、内陸の農民は食糧を求めて町にや⁽⁵⁶⁾って来た。このとき、商人はアワが低価格のときにこれを買占め、困窮期に高く売る、と⁽⁵⁶⁾いて責められた。また米が輸入されているが、アワも米も農民と接触する段階はレバノン・シリア系商人にまかされている。したがって、アワと米を投機のために貯蔵することについて、レバノン・シリア系商人が⁽⁵⁷⁾批判の対象となった。

他方、ヨーロッパ系大商社は卸売り仲立業の段階までしか行なわ⁽⁵⁷⁾ないが、1913年以降、アワと米

注(55) *Ibid.*, p. 39, Tableau XI.

(56) Pehaut, 1973, p. 556.

(57) *Ibid.*, p. 557.

の商業は利益が少なく、興味を示さなくなっている。⁽⁵⁸⁾

第1次大戦後、セネガルのインドシナ米の輸入は急激に増加した。米の輸入は1909年は17,130トン、1914年には49,000トンに達した。1923年には15,200トン、1929年には37,640トンであった。

米の輸入が増加した理由の一つは、取引地に労働のために出てきたり、軍隊生活を送った若いセネガル人に、アワよりも料理の容易な米が、新しい食習慣として普及した⁽⁵⁹⁾ことにもある。しかし、フランス植民地であったインドシナから、平時には低価格で、望むだけの量が輸入できたので問題はなかった。ただし1920年の恐慌は、セネガルを食糧不足におとし入れた。1930年以降、商業用作物栽培のために食糧栽培が放棄されたのは、アフリカで一般的な現象とされている。1936年には落花生の高相場により、食糧栽培はほとんど見捨てられ、米の輸入は、1934年の34,200トンが、1935年には69,067トン、1936年には90,236トン、1937年には116,685⁽⁶⁰⁾トンに達した。

このようにしてみると、輸出入商社は、セネガルの落花生特化の促進要因である。

IX-5 行政の役割

フランス行政当局は、セネガルにとって落花生生産と食糧生産との間の調和のある発展を望んできた。「単作は悪作である (La culture unique est une culture inique)⁽⁶¹⁾」という。

行政当局にはセネガルの落花生生産特化という、国際分業の感覚はみられない。

セネガル産の落花生価格が、ヨリ低い世界市場価格により圧迫されると、セネガル産の落花生のフランスへの輸入税が免除される。第2次大戦以後、政府は生産者価格を公定し、セネガルの落花生輸出割当を実施しているが、その結果は、2回の平価切下げの後、1959年になお、フランスの消費者がキログラムあたり27フランだけ、セネガルのために犠牲を払っていることになった。⁽⁶²⁾

少なくとも植民地時代のフランス政府は、セネガルその他フランス領西アフリカに油脂原料の供給を求めるといふ基本方針に加えて、セネガル人は戦時中、黒人部隊の徴兵応募に最大の貢献をしたので、本国のために血を流した植民地が、経済的に困窮すれば、これを救うのはこんどは本国である、という考えが⁽⁶³⁾みられる。

その結果、行政はセネガル内では商人に対して農民を保護し、世界の他の油脂原料に対してセネガル産落花生を保護する立場にある。

こうしてみると、一方で落花生生産を保護しながら、他方で落花生生産のために食糧生産が犠牲

注(58) *Ibid.*, pp. 557~558.

(59) Pehaut, 1973, p. 563.

(60) *Ibid.*, p. 703.

(61) R. Delavignette のことば, *Ibid.*, p. 696. より引用。

(62) Pehaut, 1967, p. 24.

(63) Guiraud, *op. cit.*, p. 181.

にされるのを憂慮するのは、政府が矛盾した政策を同時に追っていることになる。

X 結 論

セネガルの輸出用落花生の急速な成長要因の説明仮説のうち、自然条件、需要の出現、土地の豊富、農民の価格に対する反応については、仮説はみたされる。労働はつねに生産の拡張の制約条件であったが、ナベタヌが追加的労働投入を可能にした。落花生生産が食糧生産を犠牲にすることなく進展したかという問題は微妙である。第1次大戦後には、アワ生産が落花生のために犠牲にされたが、近年は逆の傾向がみられる。すでに貨幣経済の中に巻き込まれている以上、アワと輸入米と落花生の相対価格の変動によって、落花生とアワに配分される土地と労働量が変化するのは、当然である。

セネガルの特殊な要因として、とくに旧イギリス領と比べて、フランスおよびセネガル政府の落花生栽培に対する積極的政策、ウォロフ族のムリディズムをあげることができる。

第2次大戦後に落花生生産状況は大きく変わり、1930年代に行政が導入を試みたが、価格関係で普及しなかった家畜牽引スキも今日では採用されているし、化学肥料の投入も行なわれている。

かつてのフランスとセネガル、さらにフランス領植民地との油脂材料の需要者・供給者の関係は、今日ではECの枠内の問題となっている。

EC構成国の国内油脂原料農業として、イタリアはオリーブ油、西ドイツ、フランスは菜種、またベルギーは乳製品産業をかかえている。旧植民本国としてフランスが西アフリカの落花生をもっているように、ベルギーはザイル産品保護の立場にある。これに対して西ドイツとオランダは、油脂原料を世界市場のどこからでも、低価格で輸入したい。消費側としては、オランダ、ベルギー、西ドイツはマーガリンの大消費国であって、落花生に対する需要は相対的に小さい。EC内ではバターとマーガリンは代替品であり、利害の対立は大きい。

世界の油脂原料業界には、アメリカ合衆国の Procter and Gamble 社と Colgate-Palmolive 社のほかに、これら2社を取引量で前者の2倍、後者の6倍に達する、イギリス・オランダ系の Unilever 社が君臨している。この子会社 United Africa Company (UAC) は、旧イギリス領西アフリカばかりでなく、旧フランス領西アフリカでも広範囲な商社活動を営んでいる。このグループの管轄する油椰子プランテーションは、95,000ヘクタールに及ぶ。⁽⁶⁴⁾すなわちこの業界は寡占市場であって、セネガル落花生も、フランスとの間の親族的関係の中に保護される時代の去ったことを付記して本稿を終ることにする。

[パリ、1977年12月]
(経済学部教授)

注(64) Pehaut, 1961, p. 24, Pehaut, 1973, pp. 912~927.